

令和元年度 学力向上プラン

学校名 中央区立佃中学校

学校の教育目標

- | | | |
|---------------|----------------|---------------|
| ・深く考え 実行する生徒 | ・自ら学び 伸びていく生徒 | ・励まし合い 助け合う生徒 |
| ・礼儀正しく 規律ある生徒 | ・個性豊かで たくましい生徒 | |

学校経営方針（確かな学力向上にかかわる内容）

確かな「学力」をはぐくむ学校

授業指導では

- ① 実践について話し合う。
- ② 相互に観察し合う。
- ③ 授業、単元、計画、企画を一緒に作る。
- ④ お互いに教え合う。

平成30年度「学習力サポートテスト」「東京都学力向上を図るための調査」「全国学力・学習状況調査」の結果分析や、日常の学習の様子等から見られる課題及び要因

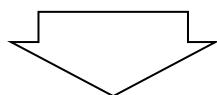
	児童・生徒の学力の課題	主な要因
国 語	○1学年の「学習力サポートテスト」において、全国の平均正答率が70.4に対し72.1と全国正答率を上回り良好であるが、カテゴリー別正答率の観点において、「関心・意欲・態度」や「話す・聞く能力」が全国平均正答率を若干下回っている。 ○2学年の「学習力サポートテスト」において、全国の平均正答率が66.4に対し70.4と全国正答率を上回るなど全ての分野で良好であるが、カテゴリー別正答率では、「言語についての知識・理解・技能」や「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」では全国の平均正答率を若干上回る程度であった。 「児童・生徒の学力向上を図るための調査」において都の平均正答率を上回っているが、知識・理解については若干下回っている。 ○3学年「学力サポートテスト」において、全国の平均正答率が68.3に対し72.3と全国正答率を上回るなど全ての分野で良好であるが、カテゴリー別正答率では、「言語についての知識・理解・技能」や「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」では全国の平均正答率を若干上回る程度であった。 「全国学力・学習状況調査」において、本校の平均正答率76で都74及び全国72.8を上回っている。	○小学校で学習してきた「国語」が苦手な生徒が多い。特に、自分の考えや意見をまとめて発表したり、書くことが苦手な生徒が多い。正解不正解にかかわらず、まず自分の意見を書く習慣を身に付けさせる。また、グループ発表を経てから全体発表にするなど発表の仕方も工夫する。 ○「漢字」や「文法」に対して苦手意識をもつ生徒が多く、自ら取り組む姿勢に欠ける。授業の最初に漢字の確認テストを行っているがそれを継続するとともに、文法の小テストなども繰り返し行うことで理解と定着を図り、苦手意識を克服する。 ○同じ言語であっても「漢字」に関しては得意な生徒が多いように見受けられる。一方「古典」に対する苦手意識が強い傾向も見られるので関心を高める工夫を行う。

数 学	○1学年の「学習力サポートテスト」において、全国の平均正答率が71.9に対し76.3と全国正答率を上回るなど全ての分野で良好であるが、基礎・活用の分野の「基礎」においては全国平均と接近している。 ○2学年の「学習力サポートテスト」において、全国の平均正答率が53.7に対し58.0と全国正答率を上回るなどほとんどの分野で良好であるが、カテゴリー別正答率の領域分野の「資料の活用」が若干下回っている。 「児童・生徒の学力向上を図るための調査」において都の平均正答率を上回っている。 ○3学年の「学習力サポートテスト」において、全国の平均正答率が56.1に対し60.0と全国正答率を上回るなど全ての分野で良好であるが、カテゴリー別正答率の領域分野の観点である「数量や図形などについての知識・理解」や解答形式の「選択」で若干上回る程度である。 「全国学力・学習状況調査」において、本校の平均正答率63で都62及び全国59.8を上回っている。	○1学年：小学校での学習が概ね定着していると考えられる。基礎学力が定着していない生徒に対しては、授業での支援を充実させて、取り組みれば分かる、といった体験をさせるようにする。 ○2学年：資料の活用の領域は、1学年末に学習した内容であるため、復習が充分でないと考えられる。既習事項であっても、用語や公式について繰り返し提示することで、理解と定着を図る必要がある。 ○3学年：観点別では「知識・理解」が目標値に対してわずかに上回っているだけにとどまっている。新しい概念や用語についての理解に時間がかかる生徒がいると考えられる。繰り返し学習を行うことで定着を図る。
社 会	○1学年の「学習力サポートテスト」において、全国の平均正答率が63.6に対し64.7と全国正答率を上回り良好であるが、カテゴリー別正答率についての解答形式の「短答」と「記述式」において改善の余地がある。 ○2学年の「学習力サポートテスト」において、全国の平均正答率が54.9に対し54.6と全国正答率若干下回っている。さらに、カテゴリー別正答率を見ると「基礎」は全国を上回っているが「活用」においては若干下回っている。多くの分野で改善の余地がある。 「児童・生徒の学力向上を図るための調査」において都の平均正答率と同程度であるが、「思考・判断・表現」において0.4下回っている。 ○3学年の「学習力サポートテスト」において、全国の平均正答率が54.9に対し54.6と全国正答率を若干下回っている。さらに、カテゴリー別正答率を見ると「基礎」は全国を上回っているが「活用」においては若干下回っている。多くの分野で改善の余地がある。	○1学年：記述式の問題において課題が残る要因として応用力の不十分さがあげられる。したがって、言語活動、及び資料活用能力向上のためのグループ学習、個々で行う資料の活用法をさらに授業に取り入れる。 ○2学年：基礎・基本の定着が不十分だと考えられる。これらは日々の家庭学習等の不足が要因と考えられる。したがって、宿題、授業での基礎・基本の復習を繰り返し行う。また、グループ学習、資料の活用法をさらに授業に取り入れ、思考・判断・表現力を身に付ける。 ○3学年：基礎・基本の定着はなされているが、学んだことを文章にすること、統計資料等を読み解くことを苦手としている。これらは総じて応用力の不十分さを要因としている。したがって、言語活動、及び資料活用能力向上のためのグループ学習、個々で行う資料活用をさらに授業に取り入れる。

理 科	○1 学年「学習力サポートテスト」において、目標値が60.5である。全国の平均正答率が61.4に対し56.6と下回っている。カテゴリー別正答率をみても全国正答率を全ての分野で下回っている。 ○2 学年「学習力サポートテスト」において、目標値が57.4である。全国の平均正答率が58.6に対し58.0と下回っている。カテゴリー別正答率を見ると、領域分野では「生命」が観点分野では「観察・実験の技能」と「自然事象についての知識・理解」が解答形式では「選択」が全国正答率を下回っている。 「児童・生徒の学力向上を図るための調査」において都の平均正答率と同程度である。 ○3 学年「学習力サポートテスト」において、目標値が55.4である。全国の平均正答率が55.9に対し53.9と下回っている。カテゴリー別正答率を見ると、領域では「物質・エネルギー」が解答形式では「短答・記述」が上回り、それ以外のカテゴリー別正答率は下回っている。	○1 学年の結果は、小学校で学習してきた「理科」ができていない生徒が多い。日常生活の中で使用されている器具などを具体的な現象と結びつけて捉えさせるように指導する。 ○植物の分類など、実物観察したり、視聴覚資料を活用したりして特徴をつかませることができていなかった。 観察や実験の目的をしっかりと意識させ、結果から考えさせる時間を増やす。班の中で話し合い、思考、表現する時間を多く取る。 ○基礎的・基本的な技能を個別に指導する場面が不足している。グループワーク等、技能の定着を図る場面を設定する。また単元テスト・小テストなどを繰り返し行い、知識の定着を図る。
英 語	○1 学年生徒を対象とした「授業アンケート」では「話す」・「聞く」能力に関する取り組みは積極的であるが、「読む」・「書く」能力については定着に時間がかかる。 ○2 学年「学力学習力サポートテスト」において、全国の平均正答率が61.5に対し68.9と全国正答率を上回るなど全ての分野で良好であるが、カテゴリー別正答率を見ると、領域についての「読むこと」に関する事項では全国の平均正答率を若干上回る程度であった。 「児童・生徒の学力向上を図るための調査」において都の平均正答率を大きく上回っている。 ○3 学年「学習力サポートテスト」において、全国の平均正答率が60.8に対し69.7と全国正答率を大きく上回るなど全ての分野で良好である。しかし、カテゴリー別正答率を見ると、領域についての「書くこと」に関する事項では全国の平均正答率を若干上回る程度であった。 「全国学力・学習状況調査」において、本校の平均正答率64で都59及び全国56を上回っている。	○小学校の「聞く」「話す」中心の学習で比較的会話に関する能力がある。しかし「読む」「書く」には取り組みづらさを感じている生徒も多く、意欲的に学ばせる必要がある。視聴覚機器を活用し生徒が興味を抱く導入方法や内容を取り入れて、4技能をバランス良く育てる。また反復学習で定着を図る。 ○丁寧に英文を読む練習を取り入れてきた。丁寧に読むがあまり、時間がかかりすぎている。そこから、限られた時間の中で読む練習や、必要なところを抜き出すなど、英語で英語を読む練習を繰り返し行っていく。 ○1、2年次にスピーキング活動を中心に活動してきたことに因る。自分の考えや意見をまとめる取り組みを、3年次に積極的に取り組ませる。状況や場面に応じた記述や手紙・電子メールなどの書き方を練習していく。

体 育	「東京都児童生徒体力・運動能力、生活・運動習慣等の調査」の結果から、一部の学年を除き東京都の平均値を若干下回っている。 ○男子は握力・上体そらし・長座体前屈等において3年生を除き都の平均値を下回っていた。 ○女子は1年生を除き立ち幅跳びやハンドボール投げ等で都の平均値を下回っていた。	○男女ともに基礎的・基本的体力が備わっていない。そこで男子は授業時の準備運動を大切に行い、柔軟性を養わせる。種目ごとに、体力や健康との関連と意義を理解させる。 ○女子は準備運動から瞬発力を鍛える内容を取り入れる。グループ活動を取り入れ、生徒同士自発的に活動に取り組ませる。
-----	---	--

学力向上に向けた視点	年度末までの目標及び指標
①学力基盤	授業評価アンケート・学校評価アンケート・外部評価委員会等において、「基礎・基本を身に付けているか」という項目等が80%を目標とする。
②授業改善	学校評価アンケート等において、「授業改善を努めているか」という項目が生徒・保護者ともに80%を目標とする。
③教員の指導力	授業評価アンケート・学校評価アンケート・外部評価委員会等において、「授業や補習を工夫し、生徒の学力を高め、個性を伸ばしてくれているか」という項目等が80%を目標とする。
④家庭との連携	「学習力サポートテスト」、「学力向上を図るための調査」、「全国学力・学習状況調査」等で、1時間以上家庭学習をしている生徒（塾等を含む）が1年生では50%以上、2年生では60%以上、3年生では70%以上を目指す。
⑤体力向上	「東京都児童・生徒体力・運動能力、生活・運動習慣等調査」の生活運動習慣等調査結果で、東京都の平均値を上回る。

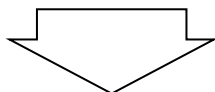


【目標達成のための具体的な取組内容】

①学力基盤	
取組Ⅰ	年間指導計画・評価計画・学習の手引きの活用と年間を通した授業時数の適正化。
取組Ⅱ	・朝学習と基礎検定 週3回朝学習（国・数・英）を実施し、基礎的・基本的な内容の問題に取り組む。同一教科を連続して数回学習した後、まとめのテストとして基礎検定を行う。 ・校内研究「東京2020の機会を生かした国際教育の推進」 学習目標を明確にし、学び合いの力を育てることでグローバルな視点をもつ生徒の育成。 ・その他 夏休等の長期休業を利用し補習授業（国・社・数・理・英）の実施。
取組Ⅲ	年2回実施する生徒対象の授業評価アンケート（1学期末、2学期末）および教員対象の研修会（夏季休業中、3学期始め）の活用

②授業改善	
取組Ⅰ	・教員相互による検証。 (公開授業・研究授業・授業評価アンケートの報告会等) 校内研究を通した年間5回の研究授業による授業改善(授業における話し合い活動の充実) ・本時の目標と振り返りを生徒に分かりやすく提示し、授業への取組意識の向上を図る。
取組Ⅱ	生徒対象の授業評価アンケート及び自己評価アンケート、学校評価による検証
取組Ⅲ	保護者対象の学校評価・外部評価による検証。
③教員の指導力	
取組Ⅰ	・学習の手引き、授業評価アンケート、通知表、教科面談、各種テスト、学力向上プラン、校内研修を活用したPDCAの実践 ・知識的側面、道徳的側面、体験的な側面による授業力の向上
取組Ⅱ	管理職による授業を観察、及び指導・助言
取組Ⅲ	教育会や各研修会での研修。
④家庭との連携	
取組Ⅰ	年2回の三者面談(3学年は4回)に加え、希望者を対象に教科面談を実施。また状況に応じた個別面談や家庭訪問。
取組Ⅱ	毎日の生活記録、定期考査前の学習計画表の活用。
取組Ⅲ	月1回の学校だより、毎週末の学年だよりを通しての情報提供および啓発

⑤体力向上	
取組Ⅰ	・保健体育科授業における準備運動の充実。 ・体育祭における全校生徒による組体操実施、組織的な創作ダンス。
取組Ⅱ	骨密度測定を行い、自分の食生活・運動習慣を振り返る。
取組Ⅲ	連合水泳大会、連合陸上大会の練習会、運動部を中心とした部活動の奨励。



【取組結果の検証】

学力向上に向けた視点	取組の成果	取組の課題
① 学力基盤	年間指導計画・評価計画を基に授業実践を行った。各教科の教員が研鑽に励み、生徒アンケートで授業の内容が分かると答えた生徒は90%だった。	朝学習と朝読書、基礎検定に取り組んできた。朝読書が読解力の向上と学習環境作りに有効的だった反面、朝学習の採点に朝学習の時間の多くを費やした。今後は朝の時間の使い方について検討し、より効果的なものにする。
② 授業改善	学校評価アンケートの「授業改善に努めている」という項目において、校内研修・研究授業を通して、授業改善に関する情報を共有した。各教室に学習の目標を掲示し、振り返り、生徒たちは見通しをもって学習を進めることができた。	知・徳・体の知では授業改善に主眼を置いた研究テーマに沿って、引き続き生徒に還元できる研修を行っていく。学習目標について、学習の見通しのたて方や、振り返りの有効性を、今後研修課題として取りあげる。
③ 教員の指導力	研究奨励校としての校内研修を知・徳・体の分科会に毎回分かれ研鑽を深めるとともに、研究会を通して各教科で指導力の向上を進めている。教科内での授業観察、指導助言、OJTを通した教師同士の研鑽も深めている。	より効果的な成果が出せるように、研究を深め、様々な研修を通して指導の精度を上げていく。教員間でのコミュニケーションを活性化させていく。生徒の学習状況の把握に関する研修を実施し、組織的に目標を定め指導力を高める。
④ 家庭との連携	面談や保護者会等を通して、情報発信を積極的に行った。担任と生徒、そして保護者と連携を図ることができた。デイリーライフや学習計画表も有効活用できた。	一部で十分な連携を図れないことがあった。そこで三者面談の内容をさらに検討し、担任、生徒、保護者とのコミュニケーションを密にする。特に、学習状況の振り返りや、目標の設定、進路相談などを丁寧に行っていく。
⑤ 体力向上	保健体育を中心に体力作りに積極的に取り組んでいる。特に体育祭では、組体操やダンスなどに生徒たちは自主的に取り組むことができた。また部活動においても都大会出場など記録を残した。	運動機会が少ないため、体育科を中心に、運動部や運動を行う行事への参加を奨励し、各行事の練習を組織的に行うことで、生徒の運動への意識を向上させる。また、運動を続ける意欲をもたせる環境作りを行う。